

# 齢を重ねるということ

坂田三允(群馬県立精神医療センター看護部長)

『紅一点論』以来、斎藤美奈子に注目している。私よりも10歳も若いのだが、彼女のものの見方が好きだし、その表現の仕方(たとえば、村上春樹のところで述べられる「ペパーミント・ガム?カシミヤのセーター?ケッてな感じではあります」というような)が好きなのである。本書は彼女のたぶん最も新しい評論集。といっても、「はじめに」で述べられているようにこれは作家論ではない。80年代から90年代にかけて「一時代を画した八人の表現者&言論人」たちを「スターダムにのし上げたジャーナリズムと、多くの読者」によって、「彼らがどのように語られ、評され、報じられたかを見ることで」、アイドルのアイドルたるゆえんを探ると同時に、彼らを生み出した時代について考察したものである。

『文壇アイドル論』で取り上げられているのは、村上春樹、俵万智、吉本ばなな、林真理子、上野千鶴子、立花隆、村上龍、田中康夫という面々である。上野千鶴子や立花隆がアイドルか?という気もしないではないが、彼らの著書がベストセラーになっていることはいうまでもない事実だ。

斎藤美奈子の本に、次に紹介する古山高麗雄は、当たり前だが登場しない。『妻の部屋』は帯にあるとおり、終戦戦争の記憶をつむいできた芥川賞作家が、妻を、旧友をしのびつつ自身の年輪を記した遺稿集である。ここで取り上げたのは、斎藤美奈子にちょっと異を唱えたかったからだ。彼女は、上野千鶴子の項で、上野と曾野綾子との論争を取り上げている。上野が全共闘体験を「わたしたちにとって、ひとつの『戦争』

だったのかもしれない」と書いたのに対して、曾野が「『学園紛争』はいかなる意味においても『戦争』などではなかった」と反論したのである。斎藤はそれを古典的な左翼と保守の対立とし、「どっちもどっちの気もします」と述べる。もちろん、ある意味でこれは感情が多分に入っている「けんか」であり、「どっちもどっち」ともいえるのだが、私は曾野のほうに感情移入してしまった。私は戦争を知らない。しかし、曾野がいうように「学生は危なくなれば、いつでも闘争を止めて家に帰ることができた」のであり、戦争とは、古山が書くように「歩兵にとられたのも、戦地へ送られたのも、私が選んだわけではない。(中略)軍隊からの釈放は、見果てぬ夢であり、空想の中でしか考えられなかった」ものだと思うからだ。

2月22日の読売新聞は、全国青少年アンケート調査の結果として、「もし日本が外国に侵略されたらどうするか」という問いに43.8%の者が「安全な場所へ逃げる」と答えたと伝えているが、甘いなあと思うのは私が年をとったせいなのだろうか。そして年をとった私は、古山の「孤独死」と題される短編で述べられる「自分の考える正義を他人に押しつけて争うようなことは慎みましょう。(中略)老いてなお生きいきと生きろだとか、年齢に関係なく、人は前向きに物を考えなければいけない、だとか、そういうことを言う人が多過ぎるのではないですか。前向きであろうと(中略)しょんぼり生きることになっている人も、それぞれ自由です」という言葉をしみじみと噛みしめたのだった。▲

さかた・みよし

2か月に1度この連載を書くのに、四苦八苦しています。ピーンとくる本に出会うまで、結構時間がかかって……でも、1度手にした本は、おもしろくてもおもしろくなくても最後まで読むという習慣が身についてしまいました。これはいいことなんじゃないかなえ?

●群馬県立精神医療センター：〒379-2221 群馬県佐波郡東村大字国定 2374

